

# 少人数集中教育

## —新潟大学における初修外国語教育の改革について—

人文学部 金子 一郎

### Small and Intensive Classes — On the Reform of Foreign Language Education at Niigata University —

Ichiro KANEKO (Faculty of Humanities)

As a consequence of the university reform in 1993, with the new academic year, opening in April 1995, there will start for the first time at Niigata University a so called 'intensive course' in German, French, Russian and Chinese, in which students from all faculties can take part.

The course will be practised in small classes and with 4 lessons per week, double the time of which was taught up to now. The aim of the new course is based on the simple conviction that qualitative improvement in language teaching within General Education can only be achieved by intensifying and varying the learning process. This language course is the focus of the language teaching reform and will be extended in the coming years to enable students as many as possible to get a more efficient training in foreign languages.

The 'intensive course' in German, French, Russian and Chinese is not completely new but was carried out already successfully at the Faculty of Humanities for the last two years. In this paper it will be exemplified, how the course can change language teaching, especially how it heightens achievement in language competence of the students and how this again spurs their motivation.

It also will be pointed out that language teaching at the stage of General Education has to be different from that in highschools, so as to change the students attitude from a passive and receptive one to a more positive and constructive one.

**Key words:** Reform of language teaching, Intensive course, Heightening of achievement, Enhancement of motivation, Different intention of language learning

## 0 はじめに

平成5年度の教養教育改革において、旧教養部の未修外国語系列は、これまでの制度的枠組みを見直しクラス規模の少人数化を軸とする大幅な改革をおこない、外国語教育の活性化に一定の成果をあげてきた。しかしこの5年度改革の最大の功績は、それ以前の平均80人規模の初級クラスに見るような多分に形骸化した教育状況に大胆にメスを入れ、それを正常化に向けて大きく改善したことであり、これによって長期展望に基づく次の改革のために道を拓いたことであった。今回平成7年度授業計画に盛り込まれた全学向け初修

外国語I期集中コース（全学集中コース）は、このように5年度改革の後を承けて、将来あるべき外国語教育の姿を追求する中から生まれた構想を具体化したものであり、私達はこれをこれからの初修外国語教育改革の核になるものとして位置づけている。この構想の基本的な考え方は、外国語教育が持つ多様な可能性をできるだけ高いレベルで実現し、教育を真にその名に値するものにするためには、それに見合う更なる少人数化と集中化が欠かせないということである。平成7年度にはこの全学集中コースはクラス規模30人、週4コマで朝鮮語を除く各初修外国語（ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語）1コースずつ開講される。

コースの概要、期待される教育効果等については後述する。

この全学集中コースは、限られた開設コマ数を有効に運用することで、現行の教養教育制度の枠内でどうにか実現を見たが、平成7年度にコースが収容できる学生数は全新生の僅か6%にも満たない。(2年前に開設され、この全学集中コースのモデルとなった人文学部の集中コースでは新生の60%がその履修を希望している。)出来るだけ多くの学生に開かれたコースに拡充していくことがこれからの課題であるが、このためには早晩初修外国語の必修枠の見直しも避けがたいと思われる。一般に外国語を学ぶ学生の数と、学習効果及び修得しうる学力の関係は、互いに反比例する量と質の関係であることを免れない。現行の必修制度は、学生が修得すべき外国語能力など、教育の質的側面について先ず一定の基準を設定し、その後その実現のために必要な量的配慮をおこなって作られたものではない。私達は、各学部において、量的ケアから質の充実への教育原則の転換が改革には不可避であることを理解され、改めて外国語教育の意味と、そのあるべき姿について掘り下げた議論をしていただきたいと願って止まない。と同時に、少人数集中を中核とした教育体制を確立することで、外国語教育が現在抱える様々な問題、矛盾の多くを解消し、これを真に外国語教育の名に値するものに近づけたいと願っている。

この報告では先ず(1)これまでの初修外国語の改革の経過を簡単に振り返りながら、その流れの中で全学集中コースの制度としての概要を紹介する。次に、(2)全学集中コースに少人数化と集中化によってどのような具体的な教育効果が期待されるのかを、このコースの構想の母胎となった人文学部の集中コースの報告を行うことによって検討し、おわりに(3)英語を含めた教養外国語教育の改善のために提言を行う、という順序で進めたい。

## 1 これまでの初修外国語教育の改革 の経過と全学集中コース

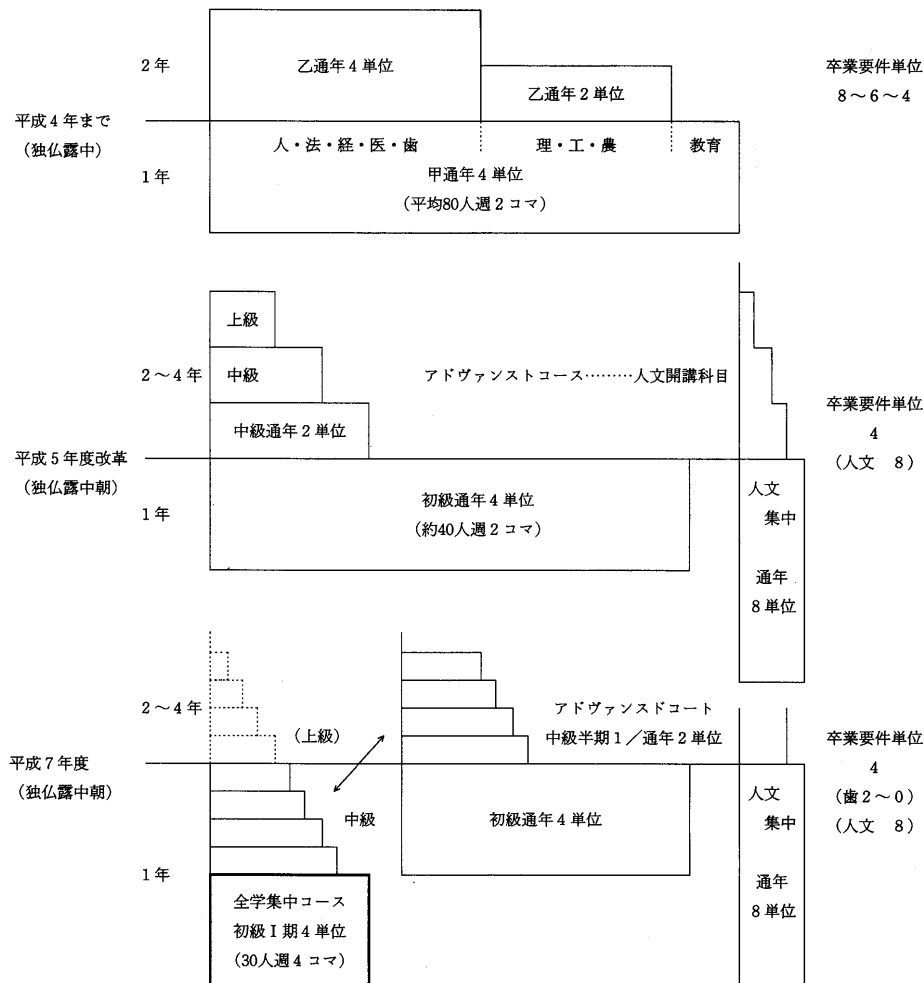
(次頁に概略を図で示したが、7年度的全学集中コースの開設に至るまでの経過の大筋を辿ることが狙いで

あるので、細部については簡略化した。)

平成5年度に行われた改革では、初修外国語については平均80人(再履修を含む)を数えたクラス規模を約40人に半減することで、漸く少人数化に向けて一歩踏み出し、それまで空洞化しつつあった教育状況を大幅に改善した。クラス規模の縮小による教育の充実という点では少なからぬ成果をあげたものの、この改革は他方で単位の削減に伴う到達度の頭打ちという代償を余儀なくされた。この点をカバーするために設けられたのが選択科目の中級、アドヴァンストコースであった。したがって改革の次の課題として残されたことは、このアドヴァンストコースを活性化し到達度を高めることであり、継続履修の意欲を喚起するためにも初級で更に少人数化を進めることと、5年度改革で手つかずだった集中化の方向を提示することであった。これが7年度全学集中コース(30人、週4コマ)と、半期開講となったアドヴァンストコースを組み合わせることによって小規模ながら可能となった。即ち全学集中コースを履修した学生は、引き続き後期開講の中級を選択した場合、1年間で5単位から、前期と同じコマ数を履修した場合の8単位まで取得することになり、その限りこれまでになかった高い到達度が実現されることになる。集中コースの修了者は、後述する人文学部の例を見てもかなり高い割合で継続履修するものと思われる。しかし初年度この全学集中コースが収容できる学生数は4コース合わせて120人(5.4%)でしかない。初修外国語の改革は明確な方向性を得て漸くその端緒にすることがこれからの課題である。全学集中コースは人文学部を除く全学部の学生で構成される。各外国語毎に学部別の定員が設けられており、学生は入学手続き時に希望する外国語とともに履修したいコースを申告することになる。集中コースは全てのコースで日本人教員とネイティブ・スピーカーが共同で担当する。

このように平成7年度には初級外国語としてI期4単位、通年4単位、通年8単位(人文学部)の3種類のコースが開設されることになる。これは中級初修外国語の多くが半期開講となることと併せて、これまでに比べて大幅に学生に選択の可能性を与え、多様化した履修形態を生み出すことになる。

初修外国語教育の改革の経過（ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語）



注1) アドヴァンストコースのピラミッド型は中級と上級（仮称）の違いを除けば、開設科目のレベルではなく、取得する単位数の合計と学生数の関係に対応する。  
2) 集中コースは朝鮮語を除く。

## 2 人文学部の集外国語コースについて

### 2-1 制度の概要

平成7年度開設の全学集中コースは、既に述べたように基本的に人文学部における少人数集中教育の経験を基に、教育効果、到達度など外国語教育の持つ可能性を高いレベルで実現する制度として、人文学部の初修外国語の担当者からいわば自信を持って提案された改革案である。しかし2年前人文学部が集中コースを初めて開設した時には、必ずしも同じような確信があったわけではない。当初はむしろ試行錯誤を繰り返しながら、制度として安定させていく中で、次第に少人数集中教育に確信を深めていくことになったのであ

る。クラス規模を30人とし、週4コマとした現行の集中コースの形態は、平成5年度の教養教育再編に当たって、これを外国語教育再生の機会と考えた初修外国語担当の教員グループが、制度の許す範囲内で最大の集中度、そして最小のクラス規模を追求していく中から生まれたものである。

現在のところドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語それぞれ1コースずつ週4コマ通年8単位科目として開講されている。各外国語とも日本人教員とネイティブ・スピーカーが共同で授業を担当する。担当の内訳は様々であるがドイツ語では、4コマの内ドイツ人教員が前期1コマ、後期2コマを受け持つ。

全学集中コースと同じく学生は入学手続き時に志望

するコースを申告するが、初年度は集中コースと一般コース（初級外国語）の希望者はほぼ相半ばした。2年目の平成6年度は各外国語とも集中希望者が大幅に増加し、殊に中国語集中コースは2人に1人の狭き門となった。集中コースを志望する理由はドイツ語を例にとると、教養科目を早く終え専門に集中したいから、というものが4分の1程で最も多く、ついで哲学、心理などの専門で必要と思うとした者、どうせやるなら集中の方が身に付くとした者それぞれほぼ同数であった。また6年度は高校で集中コースをとるように勧められたと言う学生が2人いた。

## 2-2 集中コース（ドイツ語）を担当して気付いたことと少人数集中教育が可能にするもの

- ・少人数集中コースは学生を変える。

旧制度と比較して最も大きな変化は、学生が否応なく積極的に取り組まざるをえない状況が作られていることである。これはひとつにコースが、週4回顔を合わせるクラスとして機能することによって切磋琢磨の場となり、旧制度とは逆に勉強するのが当たり前という、いわば良貨が悪貨を駆逐する雰囲気支配していたことによると思われる。「授業改善のためのアンケート」である学生が「よかったと思う点」は、「少人数クラスだったので予習など気を抜いてやる事ができなかったから、いやでも勉強しなければならなかったこと」であったと言い、またもう一人は「大変ではあったが、将来的にとっても役に立つと思う」と書いているが、同様の趣旨は多くのアンケートに見られた。このような学習環境の中では、当初のモチベーションの欠如は容易にその逆に転化する。つまり勉強することによって見えてくる高い到達度が、それだけ学習を強く動機づけることになり、投入したエネルギーと時間が無駄に終わることなく、はっきりした成果に結びつくと思われ、学生はその能力を存分に発揮するように思われる。これは教育心理上自明のことではあろうが、この点において旧制度と集中コースの違いが最も際立っていると言えよう。

- ・少人数集中コースは教師を変える

効果的な外国語教育は双方向的な授業が高いレベル

で可能でなくてはならないが、少人数になればなるだけ学生の習熟度は直接教師の力量を反映し、教師はその都度軌道修正を強いられる。身に付かない間は先に進めないというだけでなく、自らの教え方の巧拙の結果に絶えず直面させられる。「授業改善のためのアンケート」の質問「一方的に講義を進めるのではなく、学生の反応を考えながら進めていたか」と「教員が学生の発言を促し、学生の声に耳を傾けようとしていたか」に対して「強くそう思う」と「そう思う」とする回答の合計は集中4コースの平均でそれぞれ89%、92%であった。興味深いのは数値の高さだけではなく、むしろ4コースともほぼ90%前後でほとんど差がないことである。ここからすると、この少人数集中の制度が可能にする授業の双方向的形態は、教員の個性、様々な教授法の違いなどを超えて実現していると言ってよさそうである。

- ・総合的外国語能力を目指さざるを得ない

外国語教育は実践的なコミュニケーション能力を重視すべきか、それとも文献の読解力に比重を置くべきか、という外国語教育の改革をめぐる繰り返される議論は、集中コースと無縁である。それは外国人数員がコミュニケーション能力を、日本人教育が文法と読解力を分担することで大枠でこの二つの能力に配慮していたことだけによるのではない。集中度の高い双方向授業では、習熟するために言語に対して多面的な取り組みが求められ、これは必然的に総合的能力につながる。読解力の効果的な養成にも読む、書く、話す、聴く、の四つの能力は不可欠と思われる。旧制度と比べて最も大きな違いの一つは、学生が習得した言語能力に対して少なからぬ自信を持っていることである。言語の持つ様々な相に多面的に取り組むことが、たとえ母国語のレベルには遠いとしても、それが生きた言語として身についたという実感につながっていくように思われる。

- ・成果は外国語を超える

集中コースの成果の一つの物差しで計ることは困難である。まず学生による評価を垣間みさせるものとして、先に挙げたアンケートの中に授業の充実度を問う

質問があるが、これに「とても充実していた」ないし「かなり充実していた」と答えた者が4コースの平均で87%であった。しかし漠然とした問いなので何が充実していたと思われるのかは特定できない。また「二年次において、何らかのかたちで同じ外国語を学び続けたいと思うか」に対しては72%が「ぜひ続けたい」ないし「できれば続けたい」と答えている。一年次で卒業要件単位を充たした上で、なお主体的に選択して学び続ける学生がどれだけ出てくるかによって、さし当たり集中コースの成果の一つが計られると見ることもできるが、それ以上に3、4年次でより高度な学力を目指す継続履修につなげていくためには、この数字は大き過ぎるということはない。高いレベルで外国語教育が活性化することは、外国語が学生のそれぞれの専門分野で活かされるために必要であるだけでなく、裾野を形成する初級の活性化にもつながるからである。ちなみに6年度には前年フランス語集中コースを履修した学生の90%が仏語関係の科目を受講した。(なお、「授業改善のためのアンケート」のうち集中コース追加質問とその答の集計をこの報告の末尾に添付した。)

前述した、「いやでも勉強せざるを得ない」、そして勉強することによって見込まれる成果が学習を動機づける状況、高いレベルでの双方向的な授業、またクラスの中での切磋琢磨などは、直接的には外国語能力のより高い到達度となって結実することになるが、他方この恵まれた学習環境は、一年間で学生をやはり確実に変えた。外国語の学習を通じて自己の能力の可能性を追求した体験は、意欲的、主体的に学習に取り組む姿勢として定着し、これは大学生の貴重な資質として、(貴重と言うより、当たり前と言うべきだが)外国語を超えて広く活かされられると思われる。「受験生を大学生にする」という言い方があるが、主体的に取り組まなければ言語は身につかない、またレベルが高ければ高いほど主体的に対応せざるを得ない、という言語教育の基本からすれば、教養教育としての外国語がこの契機を作り出す役割を担うことも当然のことである。集中コースはこの当然のことを漸く制度面から保証したに過ぎない。

・試験でカントを課してみた

次にやはり到達レベルについて報告しなければならない。この集中コースのドイツ語能力の到達度を見る唯一の客観的な基準はドイツ語検定試験しかない。29人が受験し、全員が4級に合格したが、これは検定試験のレベルから言ってむしろ当然のことであり、3級との併願を勧めるべきであった。

他に学力を判定する資料がないので、6年度の期末試験について報告する。試験3題のうち2題は初めて読むテキストの理解を見るもので、その1題は一般的なテーマを扱ったテキストで、レベルとしては大学院入試程度を考えた。これは辞書なしで読ませたが、ほとんどが正確に大意をとらえていた。もう一つはある程度高度なテキストということでカントの『啓蒙とは何か』の冒頭の一節を課した。こちらは辞書の使用を許可したが、正確に理解したのは4、5人に過ぎなかった。カントのテキストは学生の思想史の常識程度で十分理解できるもので、高度なドイツ語であっても難解なものではない。辞書なしでは読め、辞書を用いたら読めなかったということになったが、答案を調べて、これは必ずしもテキストのレベルの違いによるだけではないように思えた。辞書への依存がむしろ主体的な理解の障害になるとも考えられる。読解力と辞書の愛憎関係はしかし教授法の議論に属するのでこれ以上立ち入らない。

カントには歯が立たなかったものの、その他テキスト読了時におこなう再話(Nacherzählen)、時事問題についての見解の発表と討論、また自由なテーマで作文し、その作文を暗記した上で口頭発表するというハインリッヒ・シュリーマンの方法を真似た自己表現の訓練(テーマは旅行、クラブ活動、故郷、職業などについてのものからギリシャ神話、聖書、日本国憲法前文のドイツ語訳に至るまで多彩であった。これらはクラスの文集として製本し、冊子の形で残すことになった)など、旧制度では到底考えられない高いレベルでの訓練が可能であり、また必要であった。繰り返して言うが偶々そうだったのではない。これらの例が示す到達度は、教師と学生の個人の資質や教授法を超えて、何よりも少人数集中化という制度そのものに起因しているのである。

学生に适当と思うクラス規模を訊いたところ集中コース全体では30人という回答が最も多かったが、ドイツ語集中コースでは66%の学生が更に少ない15から25人を挙げていた(20人としたものが最も多く40%)。学生にはまだまだ余裕があって、もっと鍛えて欲しかったと言っているようにも感じられ、私はこの制度が内包する可能性の多くを、汲み尽くすことができなかったのではないかと反省している。旧制度では膨大な数の学生を前に無力さを味わうことが多かったが、集中コースでは制度のメリットを汲み尽くすことが教師の課題になる。

以上ドイツ語集中コースを例に、制度としての少人数集中が外国語教育をどのように変えたかを概観した。私達はしかしこの30人週4コマ制度が、半期、通年を問わず外国語教育が最終的にたどり着く理想的形態であるとしているのではない。これは新潟大学の外国語教育が、現段階で示しうる教育改善のための一つの現実的選択肢以上のものではない。将来具体的にどのような教育形態が展望されるのかは、学生と教員がこの少人数集中教育にある程度成熟した時に見えてくるはずである。

### 3 提 言

終わりに担当した集中コースでの経験と反省から教養外国語教育の改善のための提言を行いたい。

外国語科目の名称として「英語」、「ドイツ語」などが存在することは一応自明なことでとされている。私はこの自明さのなかに実は教養外国語教育の停滞の一因があると考えている。私は「ドイツ語」を教え、学生は「ドイツ語」を学ぶことになっているが、学ばれるべき対象が、発音、文法など規範性としてのドイツ語の体系そのものとして与えられる初級においてはこの名称は正しいし、何の問題も生じない(体系の学習は無論自己目的ではないが)。しかし中級ではどうであろうか。体系の学習そのものを看板にした中級の授業はあり得ない。多くの場合何かのテキストが読まれる。テキストを「語学教材」と呼ぶことにも窺えるように、どのようなテキストも「英語」ないし「ドイツ語」を

学ぶための材料と位置づけられる。外国語そのものを絶えず目的視する習性は学校時代の英語教育によって培われたものであろう。例えば中級の講読でゲーテの作品を読むとする。「ドイツ語」の授業では学生はドイツ語を学ぶという目的のためにゲーテという手段が用いられると理解する。その結果ゲーテのテキストは発音と語彙と文法と少しばかりの内容解説の中に解消されてしまう。学生が学ぶことはゲーテのテキストの個性よりは、あの規範性の体系の知識として役立つものが中心となる。実はこれは外国語を学ぶ方法としても甚だ効率の悪いやり方である。体系のために学ぶ限り、学生は永遠に英語であれドイツ語であれ自分の学ぶ言語に対して主体的な関係を作れないからである。主体的な関係を作るには言うまでもないことだが、外国語そのものを目的とする高校までの教育を踏襲しないことである。大学の中級以上では、ドイツ語のためのゲーテ、の代わりにゲーテのためのドイツ語、とすべきである。体系についての知識それ自体は、言語主体の知的活動のため手段として活かされてこそ意味があるのであり(受験英語を除いて)、そうすることが外国語能力の養成には遥かに有効である。

以上の理由から私は初級以外では「英語」、「ドイツ語」などの名称を廃止し、各々授業で扱う対象に相應する呼称、少なくとも例えば、「文学英語」、「哲学ドイツ語」、「時事問題ディベート英語」、「歴史ドイツ語」等々に変更することを提案したい。中級ともなれば「英語」ないし「ドイツ語」を自己目的として学ぶことより、むしろそれぞれの言語によって何を学ぶか、に比重が移行するからである。また学ぶ対象を明確にすることが主体的な語学力の向上により資するだけでなく、教員にとっても分野を限定することで、その専門的知見を一層外国語教育に活かすことができる。文学であれば当然ながらテキストを最早「語学教材」としてではなく、文学作品として扱うことが可能となる。またそうすべきものであろう。

同じ理由から、それぞれの分野の専門教員によるたとえば「法学英語」、「物理英語」、「医学ドイツ語」、「教育学ドイツ語」等々などの開講も真剣に考慮されるべきと考える。

## 授業改善のためのアンケート

(集中コース追加質問 29～33)

(29) 予習、復習に要した時間は1コマ当たり平均してどれくらいでしたか。

- ① 0時間 ② 0.5時間 ③ 1.0時間 ④ 1.5時間 ⑤ 2.0時間 ⑥ 2.5時間 ⑦ 3.0時間

1	2	3	4	5	6	7
10	40	26	18	7	2	3
( 9.2)	(36.7)	(23.9)	(16.5)	( 6.4)	( 1.8)	( 2.8)

(30) 外国語を効果的に習得するためには、今の制度の中で週何コマが適当と思いますか。

- ① 1コマ ② 2コマ ③ 3コマ ④ 4コマ ⑤ 5コマ ⑥ 6コマ

1	2	3	4	5	6	7
0	2	37	61	6	1	0
( 0.0)	( 1.8)	(33.9)	(56.0)	( 5.5)	( 0.9)	( 0.0)

(31) クラスの規模は何人程度が適当と思いますか。

- ① 15人以下 ② 20人 ③ 25人 ④ 30人 ⑤ 40人 ⑥ 50人以上

1	2	3	4	5	6	7
12	29	14	51	1	0	0
(11.0)	(26.6)	(12.8)	(46.8)	( 0.9)	( 0.0)	( 0.0)

(32) 授業の充実度はどうでしたか。

- ① とても充実していた ② かなり充実していた ③ どちらとも言えない ④ あまり充実していなかった

1	2	3	4	5	6	7
25	70	9	3	0	0	0
(22.9)	(64.2)	( 8.3)	( 2.8)	( 0.0)	( 0.0)	( 0.0)

(33) 二年次において、何らかのかたちで同じ外国語を学び続けたいと思いますか。

- ① ぜひ続けたい ② できれば続けたい ③ わからない ④ 続けたくない

1	2	3	4	5	6	7
22	57	23	4	1	0	0
(20.2)	(52.3)	(21.1)	( 3.7)	( 0.9)	( 0.0)	( 0.0)